

武器考證

十五

				和書門類
二	一	八	二七九一〇	
三	四	七	號	
冊	架	函		

庫	文	閣	内	
五			二七九一〇	和書
四			號	
函				
一			冊	
架				

内閣文庫	
番號	和 27910
冊數	23 (17)
函號	154 5



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



武器考證卷十五

書目

平家物語長門本

貞親教訓書

日置流法要錄抄

職原抄

長秋記

二條殿裝束抄



明治十三年購求

奈温志古曾世爾舟左
平留布其以巧應濟之

眼して火のふれをさげると其刀のぬき玉

しては質發し初はあててのこまれりては目

しと氷をせのやうにせえりる。○是ヨリ下

刀懐カナト、アルハ皆此黒サヤ一キ

ノカノ丁ヲサシテ云ヘルナリ

木賊色袴衣 萌黄威腰巻 胸板 太刀付法

袋 梅皮色袴衣 黒糸威腰巻 割鞘太刀

同糸の家貞左名寄もせよりさるれありはハ

ふぶより目とらけてせくさ起の袴衣の中

小高黄のせしし腹巻のむかひにせをたては
袋つける太刀付法もさして腹上の山座
しりる同糸才さりのやの平六赤房を十七七
ありもはた健ものへはさくねぬと
かまこれ度しなるねあはしりるのあり
りり松皮色の袴衣のり一思いさかしの
腹巻もさく備前作の三尺寸ありも
やうさゝの太刀の尻もさくして袴衣の袂よ
もよと山して

腰刀 同糸紫宸殿のは後へは袴の刀

くくの風上人のあまゝゑさゝくあまゝゑさゝ
司と終しく世刀と風上の大整く並刀
せとあゝあゝと出さゝくうり

懐刀 同条昔よりしと昇風の人れ並刀

く懐刀指事かし衆科く中行船しふと
人く懐刀さゝく○此懐刀ハ腰刀之形
サヤマキノ丁ナリ

兵具腰刀 同条忠盛郎従せしと兵具と

ふんせしと名と風上の山厚く公重の弟と
又腰刀とよと之格く并會の庄列す

か糸た平、希代末関の狼藉く

鞘卷 **木刀** 同条平全併の刀既く主及司下

新重の急先と公出されく刀の實と
つ多て科の左右有物さうしと中のれと主
上尤下れと思のれく刀と公出し
敵の覧ありんれとくしとあまの里好
りりり中ハ木刀く紙銀平存のり
り

唐皮禮 **小馬太刀** **板丸太刀** **水破六破太刀**

同条に唐皮少馬といふ禮太の清盛が
さあつる件の唐皮少馬といふ人のつくま
あつたに依りての禮之を相武天皇の御物
圖法印也とありと奥義の究然たる天下
一の真言論言に述べて其宸殿の御書
ふんとていふんさういふ不動言の
の法と修せしむる七百の末の
小葉をもちてすまはしむる中
ある小壇のうへにあつたり是とんさく一
の

檀白裙金物

禮之にのほほの裾の白く
ある蝶さうちの件のもとの系感
草おとする衣とりぬしてこれを衣の毛
雨にま残まりぬとのあつたり
中 小鷹と云太りて唐草
あつたに七百の末の時より主上南
殿に山佛ありて東天と山深ありて八
尺の靈鳥ありて大座より主上御
とありてありて靈鳥御の

此南

うげり 靈鳥とていふ 我々大神虎の
 の御知のありしをりてさそ 洞の下よりしめ
 りとと御知とて 虎とていふ 之上 世にありし
 るづり 名をれり 八尺の大靈鳥の洞の中より
 出たるといふれとて 小鳥とていふるを
 皮小鳥とて 天下のまゝ 虎とて 執し 思ふれ
 とれと 本朝の宝物とて 甲冑 砂金 銀 玄杖
 水破 名破 太刀 我國とありしとて 一 事 是なり
 多れ 一 事 貞盛の時に 世に

傳の 希代の宝物 是なり 孫丸も 世にありし
 了りし 由りしとて 尚腹のさい あるなりとて
 頼朝の 赤平 傳の 是 足利 寺の中 名物とて

具足 三枚冑 大荒目 護草 摺

如常葉 大長刀 同卷 額立 論 後 乃 古 抄 傳

親 高 房 執 至 房 金 剛 房 由 士 房 也 是 人
 あり 進 出 中 高 勢 を 愚 意 の 事 也
 尤 世 也 事 の 記 也 是 今 抄 也 也

甲しりらふいに割もやとせや切ましり
之不実人言つるま耳夫元者の死ぬる
可しと死するにすす世とものら⁺忠也
出ぬるふれたた古かく出ぬるま⁺布
とせま⁺事ハ一定なりと沙汰せま⁺人
死ん事生く世のら⁺死ん今一度
雅く中も對面とせ⁺糸り⁺ま⁺
怒り^{ナラシ}人の⁺世⁺立⁺ま⁺地⁺
子⁺思⁺立⁺事⁺

せと懐より刀を元出し⁺布を⁺切⁺
乱髪と烏帽子引女と袖と⁺出⁺

しやかしこくり⁺○
親人⁺妻⁺子⁺も⁺切⁺し⁺此⁺事⁺も⁺切⁺る
切⁺ま⁺し⁺り⁺と⁺妻⁺子⁺も⁺切⁺る
親⁺右⁺の⁺人⁺の⁺切⁺る⁺事⁺

弓袋料白布 同卷⁺新大納言⁺

一人⁺拵⁺事⁺也⁺と⁺切⁺る⁺事⁺
か⁺き⁺の⁺事⁺有⁺る⁺櫃⁺合⁺銀⁺上⁺の⁺事⁺
五⁺十⁺端⁺元⁺出⁺し⁺の⁺事⁺
多⁺田⁺親⁺人⁺の⁺事⁺也⁺と⁺切⁺る⁺事⁺

日比がんと申はる事、大將軍とて一向
此邊さしものことあり。とらば袋の料と志んは
今一度は、いふやと志いりりれと行徳り
一こまりて三度と布くもさうち掛く
押のけくまると創師等よりてえてり

鳴矢

白篋ウスヤウツリ

福矢

卷式

白山神樂振
上山一糸 後二條園白篋、鳴矢、
おまをいれ、すま三子人の庇徒多し、
てとく、白山の也、さしり、
まえん、の思ひ

が、うして八王子権現二度、
事あり、し、
中
畧 六、
おして、
の悉敵降伏、
白篋、
三、
す、
鳴、
は、
鳴、
夫

鳴矢

ハ即カフヲヤハ鳴夫ト書テ
カブラ夫トヨムナリ

直衣負矢

金化太刀

黄伏輪鞍

顯文紗袴

衣火威鎧

切符伝矢

重菱弓

噴物造太刀

白伏輪鞍

同卷

日吉津樂
入路の糸

小松内大臣

守邊公儀の事ありし所を申すに
ころぬ此の古刀帯てまんきん
古くもくすしはく貫如く
て伊賀伊勢ある国の若等
具しと申す所の古刀門の陣
す

カモメシリニ
ハクトハ太刀
ノシリヲテラ
スフテラスト
ハシリアカリニ
ハクナリ

源兵庫頭頼政と以文沙の相衣り上とて
しとておきしとの袴切ぬの心矢と書
けらの生中きり二尺九寸の弓との作の古
刀も先よりしとてはかし麻毛多しとて
ゆきましの袴重く糸よりりつとて名
授省競唱とて一人あよのちありか
りり等三万余人は男りしとて小陣の唐門
とて固免りて

褐衣袴重糸
里草威大荒目袴
裾金物
袴

尻鞘 黒津羽伝矢 角管 塗籠篋持太

大長刀 黒鞘 同糸渡遠の丁七唱とる

褐衣ノ衣
ノ字ハ六
誤リ之以
下皆同

大底の中へ使者とる唱生年世に七
尺半ある甲の白くきりける褐衣の袴
糸一連皮威の太め月のかし那もの折
るふふ筋の皮は尻鞘の古刀帯とくつ脚の
伝矢のはのます今も其に先へるやん
ふ初云のしそぬし一免考の弓の少
切り大長刀とるやん麻毛のるのぬ

きくふまはしはし黒袴とる
ろとぬと出ホの糸とるは
きん出候と候遠丁七唱とる者
とる針向の袖とる免へ
カハル一と○ 金物ハ
タルカ字誤リナリ
金物ハ居金物ナルハ
居ト書

萌黄系威腰巻 同糸西塔法師接津巻

者東 運 巻衣のりくはるく出り候とる
てとるおとるの腰

一矢二矢

盛衰記十六東三ホ
森ヨリ黒雲村三渡
御殿ノ上ニ引渡ハシト
シテト上ホリホリ振
ニ出サレ給ヒテ頼政
黒雲ト見タシトモ天
ハ嘗ニ暗シイツク射
ルヘシト矢所サカカ
心中ニ帰命頂礼八幡
大菩薩國家鎮守
明神祖神降敬ノ真志
ニ御座スト頼政頭ヲ
傾テテ久シク初命ヲ
蒙リ怪異ヲ鎮シトス
射ハスシハ速ニ命ヲ
捨ヘシ氏人タルハク深
ク守リトナリオハシマセト
男山三度伏特心ヲ靜
メテ能クシレハ黒雲大
ニタナヒキテ御殿ノ上
ニウヅキタリ頼政ホ

山ノ中ヨリ

頼政射鵠

同条弓矢トモて一也一矢双の者
ゆれと鳥羽院のゆ時ぬれと中記多行
のちつる啼事多き言るルれと天聴と
おと取し一する公卿とんぎあると武士
と作といゆ記と定りて頼政と免しと
伏せと作下さる昔より内書と守護しりる
辞しゆにありすがこまけりゆるゆもそ
仕會よりぬ頼政思えりゆとけと心と一系り

破ト云夫ヲ取テツガヒテ
雲ノ真中ヲ志テ能引
テ兵ト放ツヒイト鳴フ
カニ處ニ黒雲頻ニ
駈テ御殿ノ上ヲ立頭
ノ声特ヒナキテ立所
見オフセテ二ノ矢ニ兵
破ト云鎗ヲ取テツカヒ
兵ト射ルヒイフツト手
答ニテオホニ御殿
上ヲコロクトコロヒテ庭
上ニドウト落ツ其時ニ
兵庫頭頼政變化
者仕ツタリヤト叫ビ
ケレハ唱テツト寄テ
テアリヤト懐キケリ
貴賤上下女房男房
上ヲ下ニ返シ堂上モ
堂下モ絨燭ヲ出シ
炬火コトホシテエラ見
ル早太寄テ繩ヲツケテ
庭上ニ引スヘタリ殿覽
アルニ癖物也頭ヲ猿背
ハ虎尾ハ狐足ハ狸音ハ
鶴也實ニ希代ノ
クセモノナリマコトニ禽
獸モ加様ノ徳ヲ以テ

ふりつるさんこころありまゝ先と射りし
つるものありしなりと初めより只今すん
まゝものさきくハ幡大かき源氏と流すと
あまはもろとくもちかひりまもとさく
ませいにてき友のりとかゆ矢云ゆと
しそゆれはかゝ系るんおのよ下諸人目
もあゆむるる神ノ夜ゆ多一人志らるる好
りの怪鳥二聲つりおとつまら雲井
まぬりてあがる頼政おとる矢一のみ矢

君ヲ奉惱事ノ有テ
 事ヨ不思議ナリトシ
 仰を見聞要ハロミニ
 頼政ア射テリトソ
 嘆シテハ彼變化
 者ハ清水寺ノ岡ニ
 被埋ニテリ主上ノ御
 惱忽ニ宣成ニ給ニ
 テハ鳥羽院ヨリ御
 傳旨ナル師子王ト申
 御斂ニ御衣一重脱テ
 テ關白太政大臣兼
 公ヲ御使ニテ頼政ニ被
 下ケリ頼政ハ階ノ三階
 ニ若ノ膝ヲ突左ノ袂ヲ
 テ畏テ是ニ拜領ス拜
 拜日アマリノ事ナルニ折
 知リカホニ郭公ノ一声ニ
 声雲升ニ名乗テ通リ
 ケリ關白殿聞呂テ
 郭公名ヲハ雲升ニナル
 カナト仰セケル
 弓ハリ月ノイルニカセテ
 ト頼政申タリ実ニ弓
 矢ヲ取テモ並ヒナシ歌
 道ニモ類アラシトオホ
 エタリ

小ねほろふるもあはれ
 て志をいかに免れむと射り大徳して
 雲計しよあはれれは化鳥竊のそくおせ
 海をてしよもあはれれ志もへちるてしよ
 ころの頼政をえんころ二の矢くころあはれ
 てつるあにききく引てさあてあはれし
 いころあはれあはれお年を射さるころあはれし
 ころあはれあはれころてえて是れれとえり
 やあはれと矢さけあはれ太上天皇御威

の御りし御衣をいりさぬろ事さあはれ
 またあはれ御衣のさあはれしあはれしあはれ
 ありあはれはあはれ五月の廿日あはれし事
 ろのれは左大臣をえいあはれし五月廿日
 名とあはれしあはれしあはれし連歌とあはれ
 事さあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ
 しあはれし神とあはれしあはれしあはれしあはれ
 ぬむころあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ
 小しあはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

平儀抄の文の如く
 ありやこの連字は
 海を大船の如く
 公船の上を走り
 附を公船として
 連字は公船に
 及して連字

てあまのの面白きまゝ立座りて後ハ志平
 尾まゝに五月廿二日公とありてこれ介
 言其のゆるまじし時もまゝに御下りし也
 返りて来りて後より昔の巻由と
 雲外に居て閑くよる勢をいふ
 頼政と雨の中へぬえやえりしは
 ありて幸の丸 ○ 此長門本ノ又エハコ鳥
 テハケ物ニアラス十
 訓抄ニ見ヘタルモトリ之
 ハケモノニアラス

虫衣負矢 協楯 平儀 同条十旨大衆

於名なる申すは之れを夜中も主上
 孫樂、先して院佛所法位古殿一行幸留
 内大臣守燈以下供奉の人々水堂けい
 二より此をく多ありて供奉をくま
 お雅賢とわたりてお急をわたりて
 供奉をく

里皮威大荒目 三枚胃 如茅筆大長刀 圓峯

明雲備心 被流羅糸 西塔西舎、戒淨房の阿闍梨
 社堂とて三塔とて之より西にありて

羊威の禮の大あゝ免り多々羊摺とく見て
三取留とかくんむ記かし三戸、五寸のちあき
あこの羊の免れはとく多々つた大虎の中
くちとるんちとてさしこりてふりく

白大口 折り

同巻

行徳久 入道のぬむり
忠系

六月、免れちていせもせりせぬ入段も白衣
にんせきせり白りてとく白大口ぬこく
こそすしーの小袖、ちおけて左のしり
折り、ちきけて右のしりて備あらうこく

蒲扇貞大 按 蒲葵扇ナルヘニ和
名抄ニ見ユヒリヤウノ葉ニテ
ツクルナリ 蒲葵扇ハ
團扇ナリ

甲胃ヲヨロウ

常弓箭

同系侍師等ハ

のしりちうしをようむらびちてふいして
しをつたぬ

長緒並垂

黒系威腹巻

會儀太刀

同系入

道下と長緒の並垂、黒系威の腹巻、
こりね作のちりきり先履、黒系威の
きんりきり中門の兼針、四つちりきり

ヒジリ柄ノ刀

同卷

成親御被
石捕糸

入道大納言

のおとーりらうーしぬの隠るをあらう
きいもあふまーしり地帯の衣のこし
うらあふま白大いぬさうーてをさり
柄の刀心こかしく川筋帯て大いりさる
氣也さうー大納言とゆ

赤地錦直垂

白糸物打タル系威腰巻

胸板

白狼垣巻小袴

木蘭地直垂

火威腰

卷三

入道相国可押寄
院御新糸

若西法皇とゆう幸りて多

手解 平安御成二
小七月トアリ

御用かーお免すうてしつちも御意か
幸ふんと思ゆるにりる赤地の錦直垂
さうをあげらる系威のまゝ巻の物板を免
てらゆらうと安氣まらり付らるおの社
より赤地の次とまい差をきりてまけけ
らるらるぬの地巻さう祝儀のは祥の
常柄とまかされたりりれとたの振らる
て中門の廊下のきと出ら立れりその
きり物さうさうとるひん欠絶と免す

飛後身自然と本菊化の虫さすくおぼし
の襷きつと御方うらむお川むくは

着長

同糸北面の者花中へ矢も一筋

射人まこれ者もありぬと免中を侍れし
乞とよとぬまへし大方と洋海子の宮
止思えりりりりきとるがせもりりしと
るく襷ありとよとるく知せまきりる

腰巻

胸板金物

同糸子るぬもさ原の世

姿くまらと巻とまらお向し事百とやくや

思、まりし陽子とすこし引もてく腰巻の

上く素緒の衣と引りちてあか板のりか
おのよりまてきりくあてんりもかへ

少とと引りくお襷と引りかへておとせまら

○ 清盛を子息守せり
對面の物と云

甲冑ヲヨロウ

同糸太政大臣のなき多命

冑とよりし事輒りお居し是免候
言はぬの詞あり

襷袖

同糸侍とくまらとて襷の袖とせぬ

さしとてぬ

同糸侍とくまらとて襷の袖とせぬ

〇 貞丈云物ノ見トハ道具ト云
 二テハ装束ヲ物ノ具ト云武家ニテ
 ハ鎧ヲ物具ト云各其家々ニテ第一
 ノ道具ナル
 故ニ云之

平氏赤也 源氏白色 義家棒白色 忠盛棒黑色

同卷 三位入道系 字余宗 今紫事情平氏棒赤也持
 世是火性也今既景報之新書而無可令放
 光之處又平氏以平治之年号持世之事
 治兼之比上下之字具水以黑也水可滅
 赤也火昔平治今治兼以三水之字仇年

号只本来以水失火事古今不可有疑者
 也兼又今年支于金于水也故色者白于
 黑也爰尋其先蹤者八幡太郎義家棒白
 也白色則金性也刑部卿忠盛棒黑色黑
 色則水性也金于水相合生長之持相也

〇 類政之書

馬者武士之寶 又カノベ立 同卷 類朝令

昔施仲綱年行茶の所家人東國あちの原をある馬のふくたかありりるぬ
 りの魚あちの原をある馬のふくたかありりる馬あちの原をある馬のふくたか

小ぶつりる室といりてあはれゆき

秋霜一佩 白覆輪鍔 厚巻鍔 同巻 實抄 録叙

露肌 内府自筆 一状と書て仲綱と書て

つるさるれりるよへぬのちぬるま あんトぬる

くききき見奉てりり是ト中てしぬゆい

よぬくぬぬぬぬるるて是秋霜一佩ま

ぬさるてまさるるのぬさるるぬさるる

ぬくまんのぬまてあつぬさるるぬさるる

て長ぬくまんの銀鍔初ぬぬさるる 盛嗣

と使をて送るま 太刀袋 上るる

○ 秋霜トハ良叙ト云ニ朗詠集ニ雄叙
在腰板則秋霜三尺ト見夕リ小松内
府ノ状ニ馬ヲハ弩馬ト卑下ニテ太刀
ヲハ卑下セス秋霜ト書レニハ不相應
ナル **長覆輪銀鍔** **右見入り** ○ 長リフ
丁ニハ芝引モハヨセオシハ
連子テ作リタルヲ云ナリ

薄襖持衣 **衛府太刀** **法袋** **卷八** 言余信
御事末

信連とくすあまの持衣のえりあすま

新平急ぬのちりまぬ法袋一法入り

かしこ急ぼるるぬぬぬぬぬぬぬ

栴衣の小袂よりしと出しし中門のすゝも
すゝもあし

草摺 大横巻 左京子 打刀 同巻 信連 夏の家

空の侍れ中々右邊侍もを之の信連と云考へ
いおこゝろぬもそめりき也の帯にきり
ふけくよりぬきむ言くまもこ^紅草摺のまそ
えよりえぬの左りぬぬくもえんごの
まくに^中光長の中御く終る事と申あ
いんまゆ^中れま^中い川の有りぬちあも

太刀身

左吉の山もきりし打刀ぬもあも^紅申
ぬ^中そ^中ふ^中り^中ん^中ぬ^中を^中持^中る^中も^中と^中ち^中さ^中そ^中く^中出^中
一礼も方人しと^中り^中り^中る^中女^中も^中平^中人^中か^中申^中し^中も
あり^中ア^中く^中信^中連^中も^中さ^中が^中り^中信^中ま^中も^中の^中と^中兼
座^中の^中ち^中り^中ぬ^中れ^中も^中み^中と^中も^中少^中ん^中ぬ^中く^中つ^中き^中
さ^中も^中れ^中も^中も^中余^中り^中こ^中い^中く^中れ^中く^中ゆ^中り^中こ^中れ^中ぬ^中
し^中ご^中く^中あ^中て^中か^中く^中並^中り^中く^中又^中廿^中人^中寺^中り^中ぬ^中も^中
き^中り^中

萌黄系威儀巻袴 白柄長柄 同巻 後根赤 髭男系

光長く中遊く七師厄す清きそむけ七片斗
 ある甲の太力ものく十余人がちぬおどり
 関下しさるものこのあるおけあるもくさる
 おきしおむしきよろしおは白痴の長力おき
 守り一人輩子の思いよかしておけるのそり
 もくさるものくおむすもすおきすおき
 おきくおきおきおきおきおきおきおき
 おきおきおきおきおきおきおきおき

馬印

同卷

源三位入道池
糸三井寺事

万々々々々々々

おきくおきのおきくおきおきおきおき

おきく 同下文

おきくおきのおきくおきおきおき

腹巻 鏝ニトハ腹巻ヲ
ヨロトナルハニ

打刀

同卷

自三井寺擬押
おきくおき

おきくおきのおき

おきくおきのおきくおきおきおき

おきくおきのおきくおきおきおき

おきくおきのおきくおきおきおき

おきくおきのおきくおきおきおき

おきくおきのおきくおきおきおき

橋合 官州中才小三井古の悪徳つゝいひ毒妙
戦余 明多んと云者自門他つゝもさるれも地之橋
井上のよしやいふに明多ん事や好く後
束より湯家の渡在定く是幸威のちあは
の渡まるくつ胸の地心共口さゝくを以
さるる原ふしと七世しゝる是ぬりのらね三尺
みすのそりゝ絲のはけ雁靴さくさけいさ
三取甲統さくさくかゝこのむも刀又果し
くゝは是のさく古くもくさゝり地ゝ是靴ま

足輕

素よりりり同者^宿十余人皆同也の湯衣の重
きく是比おさしみの渡より足輕世多人同率
威の扱巻きり橋の上へ歩ふ云

頬貫 同条^筋まじりりおせえらるるおく急云と
出立くばるぬれぬきく好むも刀さふとさし
て左のちだくらくいさく

籠 右く見へり又同条敵十二人いふ
十一人くは勇を矢一つとを信くおさり

長刀之目扱 同条一本法作を少もおさす

渡りしりれもせよりつらいつる長刀を介
日と限りせつるせれを初めてせりくる者も
ふし一人の足多婦一人と云く七刀のめ
ぬれあまうりり

太刀目扱

同条

右の文、一、つらてきりぬれ

幾りかきりりて一人切物をみんと云くあまうり
うちをりりて向合より歌の冒すまうりて流
く折しりりて目扱のもせより打折るきり
と川へさるき入れおふと海刀きりりて

腰刀

古く足へり古く陣太刀かきりり

きりりて海刀半

海刀半

火威

赤符

同条

伊勢國の一人古市児玉

く縮六節真、康系系、黒田、平五以上三、袴
を、射るきりり火威、赤符の袴、或は、何、く、流、り
浮、ぬ、ぬ、り、細、代、の、流、然、り、其、の、其、と、忠、の
死、さ、ぬ、り、袴、ち、き、り、り、死、附、り、浮、り、り、り
時、三、位、の、通、り、り、り、伊、勢、武、者、の、流、り
火、威、の、流、り、り、り、流、の、細、代、の、流、り、り、り、り、り

胃天邊 真向 村田神 物具

同卷 足利又吉
市後守

在平家劫掠久
足利又吉考をあげて
依よまをなすい
くはさし馬をの
手よかせ馬の足
おより小ねの手鑑を
くけてあひせし
おいつつてお
まきり人をを
の辨しとつて
手とより人の
あつて後す
馬のうりつ
引あけし
いつつてお

治川 三位金造の三百金持矢先と抄へく村田其
馬も村田とて忠綱より歌を法を
よとらばよとるよとる志くつとよ
肩をゆるめてもとせりく先とる
せりつとるよ遠く人の
あまの力をふしとる村田の及ぶ
足とをくつとるあまのよ
せりつとるよ遠く人の
あまの力をふしとる村田の及ぶ
足とをくつとるあまのよ

おまきり人をを
の辨しとつて
手とより人の
あつて後す
馬のうりつ
引あけし
いつつてお

少のま一以志るおいぶ
の禮とつてお免あ
おくおの禮とつてお免あ
て引りくお河中
る一説とつてお免あ
村田すお村田の神と
まふしお二と一
あくおおとつて
馬もあつてお

度束せり三百条袴一揃もあらせす格より
みよ辰のりりさうりておりの本存ふさるさつに
て打ありし靴踏法弓杖つらとくさるのきり
さて志ましく物具のみもさしみるす

本蘭地直糸 火威袴 沢澤襪合物 襪秋白

星胃 紅母衣 大中黒廿五指心矢 濃登弓白

伏袴緞 比呂紅扇 同糸丸総もくはん地の直

糸よおせしみの襪ははだせりりかものおし
小瀬秋打しる白糸のりぬきわくをよまほし

いふる物
裾金物
裾ノ字
畧シ之居
ト書タル
ヨリ字誤

てきれるいのみぬきと然大中黒の古にきいた
る低矢既さるる原ふしてまげせのりけり中平元
て連紗芦毛あること七すくまづるぬきくぬ
中し紅くおぬきさしの襪まきくぬき糸く
りの平等院の花よりともあうくさるぬき
おひの扇形にさうりぬきくちりぬき

長縮直糸 シナカハ威袴 赤地襪直糸 黒草

威袴 萌黄生縮直糸 火威袴 同巻 三位入
道又子

自書 糸 三位入及頼政とち中へんぬきの直糸くさ

當手家如世同糸
原大夫の利長を尊
相地身防の由至
唐儀威の位を以
白草先少の馬
全重後御の海
てまてり

り包知也一の禮を思介りと限や思れハ七
と胃とまがりり子息伊豆守仲能ハ在能也
御の重等々思は威の禮を思先凡矢つと也
之く為く胃とまがりり今弟源左判發
急綱とまがりりの重等々火威の禮
公是の胃とまがりり公是の胃とまがりり
箴之規 隔當之外 同糸古州藤節標為
の肩とまがりり公是の胃とまがりり
の肩とまがりり公是の胃とまがりり

防矢

全書
平頭を長七唱
大勢の中をまき
て石よりまき
て石よりまき
て石よりまき
て石よりまき

中 畧 防矢射を以て 自害之
事 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
の 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
二 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
首 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
自 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
て 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
て 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

市あきく首と死に重宝の被つてつと板を久じり
 せつ紀の端りてかくしとてきり

首重宝の包 中刺

同系省と宇治のあて
 二柱と櫛と気と命も惜まふに鉄をりり二人の
 子も死なむと三位殿も伊豆殿も此自害にぬ
 とゆし幸れと入道殿と誰かつき集むと
 しくりて云りぬハ丁七唱つと集むとせりゆり
 言れいとしてと心はずし少くもあぢと部下
 と敵と気と事よもつとて軍とて

せふ中さくぬらておせ二程もあつて唐をて
 歌をそ一そよとてりりり君の為めとて
 主婦くせとせし親と世を此法川もあつて
 るりつとつとて元よるまると自害とてと云る
 中 其 主婦くつとつと死なれ命と客とあつてとて口
 惜ぢれ 中 父と自害とて死ぬれとあつて
 物も不及す父と是れと元何れと死なれとあつて
 返飛りてされと歸あるとあつてとて死ぬれとあつて
 父のそとつと死なれとあつてとて死ぬれとあつて

つとむくく落りりきりきりきりきり

腰巻遠袖

巾腰巻

同巻

袴社計

寺法除

腰巻の防圍梨先等も云り此者御供あり
りも世に成ると思ふ御供ありて世に成り
れりて世に成ると思ふ御供ありて世に成り
りも世に成ると思ふ御供ありて世に成り
りも世に成ると思ふ御供ありて世に成り

腰刀 腰巻之引合

同条先等も云り此者御供あり

か毛起しりきりきりきりきりきりきり

七寸計刀馬尾巻柄
七寸計刀馬尾巻柄
七寸計刀馬尾巻柄
七寸計刀馬尾巻柄
七寸計刀馬尾巻柄

七寸計刀馬尾巻柄

巻九

文苑法印寺殿院

刀柄二寸の尾と巻とから氷あせのやめる
刀柄二寸の尾と巻とから氷あせのやめる
刀柄二寸の尾と巻とから氷あせのやめる
刀柄二寸の尾と巻とから氷あせのやめる
刀柄二寸の尾と巻とから氷あせのやめる

ものた大床の上へおけのなりぬかるあり
 院中さうきうも公御殿上人御前の意
 立さうねわふかけ七尺半の法師のま
 きさうの大力ありききぬかゆわぬさうてをり
 免くまうりききぬかゆわぬさうてをり
 とありこまうりききぬかゆわぬさうてをり
 さうねわふかけ七尺半の法師のま
 きさうの大力ありききぬかゆわぬさうてをり
 免くまうりききぬかゆわぬさうてをり
 とありこまうりききぬかゆわぬさうてをり

さうねわふかけ
 刀 腰刀 七
 一物 二

太刀ノ峯 右の文 安藤古馬文の為藏の

時武者祈まじりききぬかゆわぬさうてをり

平
 安藤古馬文の
 太刀のむすをききぬ
 文のむすをききぬ
 太刀のむすをききぬ
 やかすききぬ

里勿初うききぬかゆわぬさうてをり
 也さうけう打さうりききぬかゆわぬさうてをり
 志りるさうりききぬかゆわぬさうてをり

黒漆太刀 竹矢竜 里漆弓 同巻 文覚 兵衛

佐原始 或付折馬帽子さうりききぬかゆわぬさうてをり
 白紙小袴さうりききぬかゆわぬさうてをり

足下の赤糸さうりききぬかゆわぬさうてをり
 文覚と目もりききぬかゆわぬさうてをり
 志りるさうりききぬかゆわぬさうてをり

男は出くまの弓おさる一人あつくさびく
来つる人の少人せおほくさうくせもあ
小やうゆきうそ素佐殿しせおわしん
云くはくゆくあ

白旗上結付院宣 同卷 素佐殿始
場院宣系 下橋

の全裁の時もなれの上く此院をよま
さめくもまを年々まよりりもせを
関下し

借武者 同卷 急降被
討系 二せにりげん

景廉く
くけりあうこまかり物せを
にりす

のぬれまくむくやうくありき

白根燈巻小長刀 同系 素佐殿うけ
しり

めー返してふら流のしを
せくあし

とよのつひくえし
てこまを
後

太刀ノ帯元 同系 火おくり
にせもてのり

の隣子と立よりりも
をせを
あけく
をり

け帯元も守斗り
のこ
て敵
これ入

うりと思いて見出し
し
急降
物

墓目禰 同卷 石橋山
急降系 素佐殿
方より
も付

此多若く初子免りぬるといふれと山登
こころへくくくはの大塚もあきくす
函へきれ

鶴布白 中利 海鏡子 十三束 冒先

同条さかしの文三束安あもしく中り
矢下巾着もくもく一箱の布白の中さ
ぬれ出しくぬりこ免たりく十三束さ
いりきれとぬせのほきりふぬく

片白鎧 袷金物 白丹衣 同条候野い

武家儀式隨兵片白
多見たり肩白ト
同カラス肩白ヲハ
父白ト云

系りくくくく歌も出さも見たりせく
比、若としむれと大直りしむきと生田
と芦毛の言くきさうつるが片白の禮
すも色物打く白き母衣けさうつる
それと浴くはましく免光をくしり

黼毛 禮毛 禮引合 甲天造 同条候野

く云りくゆくの者か禮の毛さくま
かくしむりれと二人ものたか禮の引合
さくりりるをさ田さくぬれく右の足え

長尾の物をすすむは新昔物語に於ては
さるる二可なりとありてさるるまじりて多
きくくりて其のるる点田刀をぬつて俣也
そとくりてまればまをたてくさ物す
刀と物とく雲すはく見れりる巻の
多りりるのけりるさるるぬけりるさ
そりてくさるるぬくさるる新昔
今更に新古ありたりて第一元元
あはれとひりて業のそめぬるのて人

もどかしくむすしとてあはれのけりる
そとくりてなるともしたるるけりり

刀 栗秋 鎗尻

刀 右 左 鎗巻

去々りりるさるるもさるる

刀 中 草摺

鍔渡輪

胸懸ツクニ

歌ニ後

ノ後才見スル

因縁 あはれさるる因縁是る

所 秀光以下兄弟五人を衛佐の首より
て追ひりて世々々其のふと大將軍さるる
尺中といひに源氏の末折と後の一は

かゝるにんをのこをきこふ。白返し今も
まじお免しうかくりなや。おほいれ
あん只一人返合して矢一つを射まけ
まおそのあやうりまよのま路め。ま合
いつふぬ。二の矢。おまじゆ。まん。い
次の矢。あまのが子。ま路。ま路。ま路。ま路。
ういつく。ふま。ま。

楠実軍 馳組軍 馬武者村柳

三浦人々小坪
合戦糸

和田小太郎義盛と先光と云り。楠実の

軍と商し志し。先光と馳組の軍と。いま
ま。先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。
先光と。いま。ある。先光と。いま。

あふ舟一矢一もあちては次の舟をりおれ
うちくさやうくおこよのうち甲をせしりけ
ゆ^昔其^昔船とるをりる船はきりりれとも中
よりいあがきや二村ぬおこまをいつまがは
おこさやそりち立し向りぬれともあす
うや久遠代かやもあくおしぬる
總中しはぬれと左刀りしぬる
別しはぬりやや中りぬ

奥足

同巻 綱 指材のさびく武者を三

勝より打出れれと小をぬきとんく
ある武者とぬく又ぬきぬのうりし
云れれと三浦^新平と流るつんをぬきとん
五人もぬいず次高皮つりしぬる
あつらぬを流つまあれよりあるぬき人
笑すやゆれれと○
人云とよそはぬ人もぬきぬりて一
赤旗 同条 島山次郎と高屋流りて赤旗の
ちしと由井の流りぬる川の流る陣をぬ

捨揃

同糸さる種鏡あぬす招地名うし引よてかいぶ

てりいりく付ゆるる三浦列ありしりあすすてあ合

幾ましりあるとるて小坪地をかくまむと平

かしあ影

小相撲 刀胸板 内冒 遠天 首ヲ被賢ニ付ル

同糸漢の世靈和和旧次所義知と相撲

れまの住人ばくれを節やと能く居ぬ連り大

の男の人とまきまそけ言くぬりしりあり

田と少せいち子にれ図中。小すあふりあ

きとすあふりけくえいあま出しと浪打際

と枕をささめてのけさるふあけよとそ相板の

上とぬまへと刀をぬりくそまりしとこれと

尻くはくしりあるる落合とりれれ相習力

と内冒く打入とりれぬと足打とそまり

落す二の首とまきりきとく体居とり下はく

り子息の二所地居とてえとて射れい義

幾のしとあれを親の歌とましりあ

とれとありあれとるりり遠天とす

幾人禮を乞ふ一ものを討まぬと云ふは
合しむお地御に兒らよりぬハ但し一
軍つらまてれをいむくは古傳にそを
この傳にまはる北にまはけあされ
ははれ三郎を力ぬはるをさしう和甲の
次市ハこさしと曹のまぢやがしこし
川よあさくこしとあさく海を力ぬはる
よりここのそをくはれはれ事あはれは
そよまをりこしとあさくはれはれ名

和甲は次市くまはりしうしとあさくは
のこまはり

浅黄糸威腰巻

同巻

衣巻

糸子返事

かりはるさしと市後りぬはりしとあさくは
とと只戸はるしとあさくはるしとあさくは
ととあさくはるしとあさくはるしとあさくは
ます政家ハれと

胃上腰巻打鉄

右ノ足

白布

同糸大介はりしとあさくは

中ねれををまねた也一もて其の定めを
よりり物一六子^余流一もりり

弟麻さき一^的 卷十 夜笠 軍案 ある時とけ

出く歌をも退教一或時とけ一取くおとれ
川墨をちやすすり一也目ももへる一とおも

一取れいつせり一事もふく弟麻さき一
的をせりるや一と見えり一とふく一教

ともておとりり 三浦大介の
相る

白旗 白身袋 卷十一 島山初 五百軍勢と白

白旗付て先陣
とけつて別後氏衛
退校せしむ
軍を重なる父は神
をこし

能あら堪や一と集りて先陣と入る

一とや中り 中 重忠に代おほち初

式徳初と集りけ流と一と取け打

一と取原成のぬる先か一と父のたいお侍の

出あ^ての向う也^よ 中 高^中の^のおとりの流

い^中のれと 中 高^中の^のおとりの流

ち^中の^中い^中れ^中の^中あ^中は^中に^中我^中日^中本^中國^中と

出^中平^中り^中の^中あ^中き^中と^中一^中と^中先^中陣^中と^中勤^中を^中辱^中し

出^中る^中流^中と^中この^中は^中や^中押^中し^中と^中さ^中と^中藍^中は^中一

久つらまされりるしり心程をよりしてを小せ
んの旗と申りる

白旗ニ藍軍ヲ押ク 小旗旗 右ノ名ニナリ

旗ノ一ノ草摺 曰卷 大度廻 道ノ糸 中ノ元ノ意ヲ

是てとりかまししとて旗の二ノ名程と申り

しし二所権現ノ幸りて相控國ノ引ノ意

て山ノ内ニありり也

軍礼 節刀 鈴 大將軍 副將軍 曰卷 維盛 賜記

糸 昔と胡敵のころて外山の大將軍と糸

内して節刀を揚る多ん辰儀南殿辰儀山内あり

て近素階下と陣と川内毎外辨公御糸例

しし中儀の節を引はま大將軍副將軍各

礼多と申りしとて糸と旗とを引しと兼平

天慶の先破も年久おぬと申りし

今ノ夜と堀川院川付康和二年十一月同晴

中ニ御弓糸射る事糸義親と追成の爲し

小ニ雲ノ白と一色とを引しと旗と揚て

草の袋と糸と新色と糸糸然と糸と糸と

第10追伐宣言

相撲御會

同系世人の先

祀大祖の貞盛之彦より上ありし中より先代
氏王の國ありて將門追伐の先代より
け孫ふ先例より先代より先代より
より先代より先代より先代より先代より
より先代より先代より先代より先代より
より先代より先代より先代より先代より
より先代より先代より先代より先代より
より先代より先代より先代より先代より
の民に湯忠久の

赤地神並至大頸端袖緋地神三尾子丸 萌黄

白糸威護

沃然地命履柳緋

綱權亮少將

維盛も赤地の神に至り大領端袖緋
地の神より先代より先代より先代より
先代より先代より先代より先代より
先代より先代より先代より先代より
先代より先代より先代より先代より
先代より先代より先代より先代より
先代より先代より先代より先代より
先代より先代より先代より先代より

矢合 同卷

源平友川 對陣系

十月廿一日あすの矢

矢合此外あり

矢束侍

同系初の本祀の弓場の者いふ事

有らんと同れれと実盛と云ふも弓矢射者
 思一りてこれられくさ^か赤と十二十三赤十
 日赤と射るものや多くは二三人法三人
 法やのとおくは獲二三欲ふとあつねく羽ぬ
 せりて射ぬるはよの^中実盛と云ふも七八十
 人もは乙畧馬もは方々の赤出は弓矢
 取も得上りたりばりまてはソく東園のあ
 こめ武者は一帯あててまあるりて面
 向ふはゆき坂東武と十人へ赤武と二人

と向ふまはれこくは光るゆきは

矢十二赤十三赤十四赤 弓二人張三人張

矢ノ羽フサ 右下見入り

幔幕 日赤平家の陣と次赤の如きなり

弓矢人々くまのまおあはていしとられ
 赤返事云人もかし○ 板木割と云者を使
 せ云きハ一時的に取の陣へ合戦のよ

の事なり

大幕 具足 日赤大幕と云るは獲板巻

左刀刀弓矢具といふ事もかく記す

一人も足さずきり○
け案く果定と云らるる
種々の道をもとめて
外のおと云句

鳩瑞

同条は事類録に言及ありは表矢と

ぬらぐさり後りりりのある計す鳩あま
ありきりたさるや

表矢

たす足さず先上りのかゆき云々

上徳録

同条のつぎにたすたはる実名と云ひ

まゝ後りりきり ぬら川と後とすて川

黒漆の衣たぶおよ母の世にる免 兜りげ

おけのさるるきりりしおけぬと後子かつと云
まのいね後り元おとるもくおけと云ひ
可演り

湯衣後直衣 尚書系威懐巻 里卒威懐巻着

同巻 南都合 銭の条 其の中へ坂井長房永免

とて七六寺十たたさる序と云ふ物多者
かー大かた後り大矢のちつ比早のよまろ小
てさけ計も射とるやと比百度射るたはる矢

大矢
サケ針
アタ夫

右に柳を者く地のふけ七尺半之楊衣の鏡
車葉く前葉の糸威はまきまのうす黒皮威の
鏡くすこすくはくく三尺五寸の大古力瓦比二尺
九寸半大古力瓦おきくすくすく

紫取漆唐綾重糸

赤威鏡

卷十二

小費
近出

厚と

丁糸大鉤
言女

後とと九市判友義鏡く一換の

方侍流能威く名をかすまきく遊くしりり
りりり判友五圍く前一時紫取漆の前後の
さくまきくある地の鏡く若毛あたるく紫と

判友の履くくちりりりりり大おの鏡くちり
ちりりりりりりりりり

湯衣重糸

草威鏡

椿篤帽子

同卷

墨候
合裁

糸 湯衣の鏡重糸く草威の鏡若くくもまき
くく切すく今く麻毛あたるく紫と川路く
あきとしりりりりり
裁中若月くあま江別石山の包
俵西古代金澤く新く

赤地綿重糸

小桜若返鏡

金伏論鞆

同糸

ある地綿の重糸く少桜と若く返くく紫と麻
毛あたるく紫と柳の鏡重糸く紫と

火威 護 白星 胃 紅母衣 白伏 袴 卷十三

筑前川 佐井七郎 上 幸 護 せり せり せり せり せり

護る 火威の 護る 白星の 胃 足 足 紅の 袴 かけ

声 籠

赤草威 護 秋秋 胃 母衣 金伏 輪 袴 因 草 赤

草威の 護る 秋秋 打 打 胃 打 緒 足 足 母衣 足 足

引 せり せり せり 連 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴

て 葉 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り

國の 臣人 冨部 太 郎 赤 威 と 名 葉

旗 差 因 草 赤 威 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴

上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り

赤 旗 白 旗 因 草 赤 威 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴 袴

上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り

引 果 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り

引 果 上り 下り 上り 下り 上り 下り 上り 下り

井 上 丸 郎 光 盛

ら 旗 上 云

鞍トツ分ニ首ヲ分

因糸法井七郎をえり押

てその心かゝるもたはほきまるとりり言光ハ
りこれのきつ事しつこのそけい分さる切落し

て歌のそゝりる魚さく 中法井七郎の家

子所与三折落お免しりりり言光二のそと

おすをわいさうくさつあふ外りりりりり

言光 因糸法井七郎の家

蔵甲冑 因卷 源氏述討 十日蔵甲冑

太初宮 幸りま昔天宮と将門と述討の伊

初蔵の護胃をさすましりり嘉應元年十
二月廿一日お火の上の付焼りりりりり例
せやと関え

笠懸 因卷 中五一条 五智人法りりりり

せせ居てやうては然七番村り母やりのむ

名をりれり母もけりも是る名をりりりり

人せり湘と輝りりりりりりりりりりり

○ 幾仲子名清水冠老れ然の書りりりり

矢文 因卷 火打城 或付城

方へは婦人等と一ツ射然しうあると思ふ
元々足利の中へおすまゝする父あり是を也
まゝに在りて城の中へ入れば子やをさす
多し 亦明威儀師
射する矢こ

内胃 内条実清太師の内胃と申すは

三川中へ流し入りて

矢並緒 内条實清太師の矢並緒と申すは

河をく物と流す

石弓 火斗 内条 加賀國高松 上州人

矢庫と箕の婦人等にはおぼしき下は八本も
く足弓と申すは河下流の物なり是を
一漆もより流すもさるも是なり 中希
威儀師の計り野にいそむるも是なり
古と元来免向くおぼしき○卷十
姉尾をるり 小竹人等ありは山に
上りて石弓と申すは可多と流すけし
矢倉と箕の婦人の名なり

篠小規 楊衣車室 首下頸巾 休絶目控里

津明 赤銅匠太刀 塗毫摺り 同糸 新晴 孫糸

中より少根や丸がて紙紙糸がしり多て是
ゆこの日福衣の遣並二葉くそ丁取中して由境
月の後くまは月の矢原くく赤銅匠の五折れ
すこしす長句ふぬり二免葉のりぬくも
ここて木曾り糸は元いさや骨て書り

表天 婚環 同糸 廿柳書と十三孝糸のぬ

こくく西の隙りふ葉を思ふる男の足の内り
かたしおきて色いやりく大善菩薩の社壇へ是り

孝るありくぬのも色子八幡大菩薩を二すり
そゆきしと監と孫をりく天橋天より飛あり
てふ後の上く遍満す

彌矢 矢入 同卷 研並山 孫糸 源氏陣のあり

物色くしと孫と指の表へ直おきて十五折れぬ
也同巻く平泉の陣へ毛と射入る平泉少き
かりす十のりや由一今く十五折れぬと射
と子す

後矢 卷十 同糸 志雄 孫糸 平泉つとら子いさく

すゝるゑつもゝゝり

練色奥陵虫 火威産 白星胃 大中里矢

重藤弓 黄覆輪鞍 同糸、武島三砂在屋有

團りゆり色の奥陵の虫糸、言おせしの産、

是れ胃粒をりゝる糸、大中里の矢、甘豆ゝゝる

と以てゝゝる糸、き友のり、おん、えゝ月色

ゑゝるのたゝく、産に黄伏輪の鞍、産て糸、りり

赤地産虫 同色 実産討 死糸 長井新友列有

実産ある地の産の虫糸、足ゝゝる三糸、金織、と押

おゝり ○又同巾久ゝ実産糸をとり、糸目内

大長ゝかり、糸目 畧 故脚、と産のり、ほと

きよと、りり、糸目、おゝり、糸目の可、糸ゝ

産の虫糸、おゝり、糸目、糸目、糸目、糸目

内、大長、おゝり、糸目、糸目、糸目、糸目

おゝり、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目

糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目

糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目

糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目、糸目

此の如き御の初てまはるる

小貝足 内胃 田巻 伊東九郎 向古抄

三股まくりの沖へ大なる定ありその

上へありぬくりを記さるるかこりていふ

云ふ自害を乞ふ思ひりし小貝足まきし

可と内胃といふまはるる

青生 奥陵 田巻 赤威後 田巻 赤威後

縛糸 藤平守親 叔父すはとのすくさよ

平家(小)おのりてまはるる赤威の藤多るる

あるる

御筆馬帽子 白帷子大口 田巻 平家都立

内大長と御筆の念かすふあきめりて

大にありり少くを記さるる建礼門院の如く

糸の中終りぬ

畫師 田巻 平 田巻あすり山ありて

気落すもの多かりりり登の山ありぬ

孫一とて終りりり

禮友右の袖 田巻六代御前姫君中門

左平が物初より元迄
唯天父の遺徳の神業
初より元より先せん
二つありて一にして
活ひしそとれも心
秘しめん

走出後、在古の社に、元有る父と、いつく

一途を、さるるを、我も、氣人、中、さるるを、

あ、云、一、し、り、と、

赤骨 同卷 池大納言 於と、まの、元、出、る、い

つ、く、と、ま、の、り、と、さ、り、ま、の、く、女、房、と、さ、り、い、い、

て、後、立、ぬ、る、事、の、心、く、り、し、り、と、傳、れ、ら、る、赤、骨

元、授、け、る、の、こ、も、い、い、

行止矢 同条、越、中、次、所、多、諸、盛、嗣、これ、は、

き、く、殿、り、も、存、さ、る、の、こ、も、い、い、と、い、は、れ、る、

う、か、止、免、系、る、者、ん、ん、と、か、ま、る、に、か、り、す、

ま、げ、り、く、お、を、り、け、り、

群村濃直垂 黒草威禮 同条、貞、徳、と、こ

む、く、二、の、重、宝、と、ま、り、い、お、徳、し、の、禮、を、る、者

徳、山、家、と、い、る、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

ま、ま、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

飯小巻物入 同条、え、り、の、中、より、百、首、は

坐、包、物、元、止、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

介、り、り、梅、井、浪、る、る、り、り、り、り、り、り、

事とらひす

雜物重宝 前黄系威襷 同系短西と練費

小物也縫了。後重宝と前黄の系威は襷等
名より重宝

赤旗 同系とらひす。吹りせきと甲州短西と

事と打系短西と新し系。付ハ世と此物あり
せきとつてこれれをせし出り短西ハ赤旗一あり

せきとせきと南とせきとて歩せり。○
法教王御所へ系り
近江源氏 祇古利
冠者多旋とせきと陣と後と

白旗 同色 言奈院王子位
可而給事系 近江源氏 祇古利

褐衣重宝 黒系威襷 赤地襷重宝 唐綾威襷

同系行衆 十部 褐衣の後重宝と黒系威の
後と一古と後義仲ハ赤地襷の重宝と後

綾威の冒名ととたけ後と
銀里金馬帽子 引柄重宝 法才サシツク 卷十

五猪才三席 惟能と派赤馬帽子と引
柄カキの重宝打らとと引り。ぬせと引り法カキ

佐いといふれ雨一伊村帰来り

弓之弦ツケスル音 平家好 卷十巨 巻一 一条系板

より引け法は多きれとてきこむを多いり

里塗ノ弓 田糸二條系板より矢矢の急ぬりの

弓を切りて淨衣の世をまゝに扱こ

胃天邊指を入髻と云 アツカノ 卷十巨 漆合致 平家

侍ちお言搦判皮を銘と入髻ハ 入髻小ち所引組

ておとと云る 中 長髻の物とてゆへも云

と云くも云くも云つるこてお記あげてそ

おももあはしに切まきりり ○ 右のうぬとてゆへの
穴居しそと云

押身板 卷十巨 実登討 実登と云い

さーおあえては地り所木のお一竹の板とつ

まゝなのもいし ぬりかきりてり

この洗つしぬておすしぬりりれと

而多しぬれされぬ実登お一竹の板と云く

つるはくこのもいりてさげてま

弓は之系板 田糸実登り弓は之系板と

上へてはしほとさし

右に物料 同条一端もゆるす者いれぬよ

せもとてあておいてきつておれぬ○又

云可ぬをきし初常とののを源にいせまはく

ますおひらけくあひまのいしやをいりり

○ 運物射
ナリ

物好大口 里系威中記 端白控 卷十五

系 証軍とやうな物ふれせり夜巻原の少他

小物好の太口少里系威の控のすし紅く端白い

唐巻深袖

多々を足くとし和りふ業と三々くさるた七刀

の証れをる巻りしとと元おろ○ 徳也と教録の
稀と云あり

三尺と追つる大長刀張の地巻りあり 古く是より

赤威控 同卷 頼朝將軍 義澄と赤威の控

是より甲やま見たりすり控りまきこきて左の証と

つと右の播磨宣旨と法元とつと先とは宣

旨とつと良のまこれぬと入系とせり相は

使者しれいりしとたれとて関からり三浦介

とと名のて三浦義朝の地巻りてはるるを法

取寄りせきく好良久くく覧取の物く小砂金
百もくなく返くゆぬ

金坑太刀 九指征矢 同条兵衛佐辰の銘

向くゆりり小倉邊の左刀小九指く征矢一腰

強りくゆり 院使右史生康定一
札銘の徳物あり

侍笠穂履 廿力雁履 同卷 物具
合裁の条 布尾古所

指取者く姓尾く留くありり銘の同とゆり

或より記の云くまうく流免は結くものあ

る或ら布小袖くあま折くあるもある物

く流ありくも糸糸矢何々さしりくゆり原急新

小さくゆりまうくあまさしりくゆりつけくものあ

るくこめくすり二三百人集くゆり物の具為

る者く七八人くゆり物具 右見

くゆり ○ 産し上もまをむやし方平同

赤地神並垂 腰楯 具足 同条 義仲押寄
法徳の条

知床とゆり大御軍くゆり門外く床札

尻つけく赤地の流し垂垂く楯楯具足之斗

て廿に拾くゆり伝矢とゆりゆり出くゆり

中しおよりてあはき志のもの一類の骨とけ
矢とより共介村黄と中と冠りりる。○
見直の上
よわの字脱するあるがし
侍字の誤りあり

毒化抄巻全 詳

同系知康と毒化抄の
巻全のやとと鐘とささりりり甲とありと
を忍らりる。に天とれ依と給と半て甲と
おし右れとと金剛とゆりたおしと詳
とつと法住寺殿の巨石の純比の上とのり
てこさとさねさく時と舞らり是とらん

者知康と天物の骨とりり也れりりる

系威懐巻 重目録巻全 同系播磨中将

雅賢のささり武略のあしとあはれ天
忙武勇の人よりおしりりる系威の五巻
小童同族の巻全を多しとありりる

薄青村衣 巾懐巻 同系水正近業

大外記振業名人の子居まとの村衣と上
多しとありて巻全とありと七条河合と
西池とあり

長猪車糸 赤綴袴 重友弓 大中里矢 噴

物造太刀 沃懸地鞍 卷十六 言徳守治 川渡糸

島山庄月次所重忠生年廿一と後車糸

小糸綴袴言友弓と丸車とと大中忠の矢友

てつもの依の左刀ととに思ととすついな花

の鞍と重くととこのりつりきと

褐衣車糸 洗草袴 里津羽矢 同糸褐

衣の車糸と洗草の袴とと里つ羽の矢友

とつ式ととつりつり島山の如ととつりつり

類とつりつりもの也

赤地綿車糸 萌黄唐綾袴 紅綴袴 袷秋胃

金流太刀弓名打絨卷 同卷 義院院 糸糸 義院

と赤地湯の車糸と萌黄の如ととあも袴紅綴

の胃と袷秋打つりか如とととととととと

とつり金流の太刀と糸とつりつり引つりつりの社

と糸と一寸半と切つり南無宗願八幡太誓

落と書とつりつり糸とつりつり

白唐綾村白地緋地綿色給車糸 紫綴袴大

中里征矢 昆燒猪 同系、武藏国伊人族丈末

糸島山守月夜部守忠多比くあやのこて
まの村名の神と緋山の跡としりくまは葉綴の
後く火中束の征矢は昆焼くか記るくまを
かすりきり

重目結村向袖赤地錦也綴虫糸 里系綴縫大

切身征矢 アノ才モテ佐タレ上矣 同系河越太

市守賴志け名毛云の虫糸は村向袖は赤地

の跡としりえくまは系綴の縫大切身の征矢

の上多くあまがかきてま記るまをくりりる

渦衣虫糸 大荒目洗華縫 カラスノ尾ノ征矢同

糸波名三初 衣月^{カレマ}主忠 渦衣の虫糸は 大荒目

洗華は縫くまは尾の征矢かすり

テウ目結虫糸 薄紅綴縫 妻白征矢 同系

梶原源孝を常布てく目ゆえの虫糸は薄紅

綴の縫くまは妻白の征矢かすり

崩勢生縮虫糸 小中虫征矢 同系飯々亦巳所

言徳^{本七}波^{本七}美^{本七}すしは縫くまは小中虫の征矢か

くさき

筆籠

同糸六人の糸をいぬきやうと塔を

くさき糸も籠も思ふ 包くおひりりれ

さもりりと管ぬりて糸をいぬきやうと塔を

紫格子子ヤウノ直糸 萌黄腹巻 守笠 護田

名久夫 少糸 袴 貝 綬 同糸 糸仲最朋 七袴

く中ノ袴と女袴袴と云 紫女之紫格子の子

中ノ直糸と紫格子と云 紫女之紫格子の子

唐ノ川直糸と紫格子と云 紫女之紫格子の子

如也く邊委くこ也りすくく 貝 綬 三変くさ

糸くくりり

赤地 赤直糸 薄金 唐綾 威 白足 胃 切身 矢

金作 太刀 金直 輪 鞍 面 糸 綬 同糸 木 曾 糸

此の直糸糸くは金と云 唐綾威の障く白足

のく糸と云く 唐に紫と云 切身の糸く 金作の

左ノ糸くく糸くは糸と云 糸と云 糸と云

糸と云く 糸の糸と云く 糸と云く 糸と云く

糸のりり糸と云く

着長

同糸市角介井く句初く云り申し

ハ何れ思ふぬ上指金のまきく是る也と云ふは
介井く申し是れも自願く初も申さし別のも
れもつらすは少く介く始ぬ此まきあるのまき
思ふまき申す世の暇をわさきある人
国旗 同糸紫糸とく一色糸く申すの旗さ
さきくお川先すくく申すは○又云さ
初く児玉煮くく己の旗さくして申す

十三束

海舟板

同糸十三束よとて申す

ハ何れ言網

海舟の他
人糸十束

まのソト申すは

は針也

海舟の板を針也

千師古所先
は針也

白菊卷

同糸少す申すは

の申す八十あるは老舟申すは
光く申すは申すは申すは
是く申すは申すは申すは
申すは申すは申すは

白羽彌矢

同糸糸重く申すは

矢一の光申すは

きんじと世曹司のこまの襷（紅）出（下）出（上）り

貴祓祓色（紅）出（下）り

通（下）り

赤地襷（紅）出（下）り 黄返襷 同糸九折（紅）糸

襷の直（紅）出（下）り 黄返の襷（紅）出（下）り 名襷（紅）出（下）り 馬の

好（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

皆（紅）出（下）り 同卷 （紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

一扇の糸（紅）出（下）り 古（紅）出（下）り

（紅）出（下）り 鴨織の案内者之
古六久利とあり

襷衣（紅）出（下）り 緋村（紅）出（下）り 紅母衣 黒緞 大巾（紅）出（下）り

二折（紅）出（下）り 権太（紅）出（下）り 同卷 （紅）出（下）り

然安次（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 襷衣の襷（紅）出（下）り 緋（紅）出（下）り

濃の襷（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

黒緞（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 大巾（紅）出（下）り

糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

糸（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り

澤（紅）出（下）り 糸（紅）出（下）り 伏（紅）出（下）り 同糸

右ノ文
ノツキ
子息小次郎は重家ハ博深と利す人
しる重家ハゆし龍目の産く産毛ある言ふ
録云て重家ハ一子也

秋野摺重家 洗革産 三枚胃 陸奥栗系ア子ハ

ノ牧 阿系 右ノ文
ノツキ 産きハ神野摺ハ重家ハ

洗革の産く三枚胃と是と重月毛ある言ふの産と白
波と云る。湖の逸也之けるハ陸奥栗系
其産毛と云ふの牧より出たり尾髪たは
重家より産くと白浪とつたり

産神振合 阿系言櫓より雨の産とつたり。

重と産の神とゆり合とて産とつたり。
然るハ
子ハ神

然る子重家ハ云り産と欲もれむと云

ヤ事ハ重家ハ産と産の神と胃の生ハ重

て重家ハ重家ハ産と産の神と胃の生ハ重

つり重家ハ重家ハ産と産の神と胃の生ハ重

重家

重月産重家 赤産産産 三枚胃 産重家 月産

毛 黒産産産 阿系平山ハ重月産の産

小本皮威の旗、三枚冒よ高ねの母衣かけ
固りすぢと云るあそきありり。旗原と云る
威の旗、三枚冒と云るありり。

井村濃直系 赤綴旗 白星冒 同系哉中

次所急情望次ま川さけりけく、身りぬま
るれと井村濃直系、左本旗の旗、玉を
冒免ふ、母衣を、さす、さす、ありり。

白旗 赤旗 同系源平あ家白旗赤旗あり

白旗赤旗ありありありありありありあり

懸ル時ハ母衣ヲ然退ク時ハ母衣ヲカナリ落ス

同系延公平山島守り免我力もいさつらん

退く時ハ母衣を、さす、さす、ありり。

とりけりくお免りありりありり

クリ落シ又カ、ル時ハ母衣ヲカナリ落ス
オカメイテ懸ルト云ハ、下文梶原源
太カ、ハ、旗、キ、ホ、ケ、又、キ、テ、カ、ケ
引、タ、ハ、カ、ハ、戦、ケ、リ、ト、云、ヲ、以、テ、ビ
衣、ハ、是、カ、ハ、リ、テ、夫、ヲ、防、グ、ハ、ナ、キ、故
ホ、口、引、退、ク、ハ、夫、ヲ、落、テ、グ、キ、テ、ハ、ナ、ス、ム
ナ、リ、ホ、カ、ナ、ク、夫、ヲ、防、ク、テ、グ、キ、テ、ハ、ナ、ス、ム
益、囊、抄、ニ、見、タ、リ、防、ク、テ、グ、キ、テ、ハ、ナ、ス、ム

兼夜堂雜錄云
 蕨の梅の一枝も
 然れども是れ梅
 況やいづれを是
 せんや
 同真事本云
 并注云蕨
 此源太者
 乍云同武士有于

内情有于外色之
 男子好合戰
 斯夏二月上旬之頃
 也初櫻一枝手折着
 兼戰懸時蕨散
 復引時蕨散甲
 鉢鏡之左右袖上
 散登有情無情皆
 人所目見
 按小長門中
 夕あを赤名
 され二月七日
 新云
 ちあ

類貫 送後木 同糸 武苑園 假人 和童 河原

太師言連同次師盛重之身二人まきありて馬

より飛巾生田霧の城戸上つて娘記まきて遣

知申とのりし之々城戸へ入る歌と

母衣才然母衣才又ク 履挿梅花 裾衣重糸 洗

革笠 同卷 一ノ巻合 枕系源吉の歌時に詠せ

まけ母衣とりけむ時と詠せまけ母衣あやめ

まきへ度へ入る歌りり武苑道中も

足へりの中もやうに記事ハ行なむ梅のまき

りりある一枝折るえ歌と云へる歌の中へ

おけ今歌時もいつ時梅と風吹まきと

歌まねと歌もくひりもはるえん歌りり

雨と雪もよふ花世手ある別れ裾衣の重

糸に尻革の禮をりりりりりりりりりり

まきとてすらすと出中りりりりりりりり

か使るりりりりりりりりりりりりりり

るりりりりりりりりりりりりりりりりり

まきとてすらすと出中りりりりりりりり

ウ込事巾のソシキク いけきりやん
も免し思ふをよきしりり

白帯 同糸馬やうぬ金銀心ん乙也そ能

了二足り鞆並ふ響をけくし能を討すを
て鞆よりけく乙命くあゆお出す

赤綴袴 獲田島久矢 同糸島山と赤綴袴

うす魚の矢肩く 三日月と云馬のけぬ成
多くゆりたうをきあうりり

三日月と云馬
のりり

桑竹公柄刀 同糸市泉の侍越中糸目多佳

是そや正しく剣鑑これと討する誇人を互り
及平くそやりのみの刀と浪平ら佐り柄

と糸竹合しるまきを関す ○ 貞丈云刀
ナリ短キ物乙又云古モ武功 = 燈人ヲ
トル丁アリエト見ヘタリ

黒草盛袴 箴 大中里矢 遠雁打鉞 小張鞆 同

卷 忠度計 一名の渚と西さく武者下段

りよふ毛口十三の八段思ふる黒草盛の袴
矢色も足ぬ袖を新く討あししるし早しそ

後々大中島の矢に五強りより白髪毛を
ふるふ遠雁打し。鈍重く二姉子の鈍りけてを
辛うりり。

小蓋内胃 打刀 同糸忠度六海をりし

るる厚く組くる二定々あし、高よりりたる
高き倫く三刀鈍とすす一の刀とよ蓋とつ
二れ、とよとつた三刀、と内胃と厚とれ
とほくとつとほくぬき、とつとつとつとつ
高合く打刀ともてた度のおいむりけす

打刀屯○

貞丈云手蓋ハ
小予ナリ

箴押巻物

同糸箴く巻物一卷とよとつ

これと丸山一とり、後若く花也云類
川巻く本札やうけを布也とせけ、たやこよ
のあ部一あま、と書く、奥く後神也
と書れ、とつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつ

濁衣虫糸村子名才冠 業不懐穢 同卷 如三
位中

為被生 抑糸 中將持此白と祝糸、村子名冠と書

新、業下流の禮、童子麻毛と云く是の
大臣殿より始りたる事、業より

禮引合言紐 同条より云く、

あり下訂、あり云く、刀をぬき、禮の引合、
し切、云、紐より、云、云、云、
強、れ、れ、れ、れ、自害、云、云、海へ、云、云、
思、云、云、云、云、云、云、云、云、云、

言、謝、の、辨、り、

赤地御垂糸 赤威袴 白草胃 逆友弓切

生矢 金流太刀 金渡袴 厚巻鞆 同巻

敦盛被 討糸 雲、云、云、云、の、治、事、業、云、云、威、の、禮、子

云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
佐、の、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、

練貫五色綿三條離南舞垂糸 同条浪打袴

云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、

とせしむれり哉 類聚あり

木蘭地ニ色々糸三ノ柳子牡丹種並糸 小具足

腰巻 同糸伊賀平内左馬家付ハ木蘭地ノ

糸ノ多クシ柳子ノ牡丹種ノ並糸ノ小具足

足平ノ高ホ二人ノ腰巻サヤトノ糸トノ糸

前黄白種 同巻 業ノ糸討 一人ノ前黄白の

種ノ麻毛有るノ糸ノ糸ノ糸ノ糸

着長 同巻 小宰相 故三位通の着長乃一

糸ノ糸ノ糸ノ糸ノ糸ノ糸ノ糸ノ糸ノ糸

木蘭地並糸 小腰巻 卷十七

肥次郎兵衛ト木蘭地の並糸ト小腰巻ト

腰刀 同巻 三位侍中ニ有馬 今一度最形の見糸

木蘭地並糸 小腰巻 同巻 法也上人言 九段並

糸ト木蘭地ト並糸ト小腰巻ト糸ト糸ト糸ト糸

糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸

糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸

糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸

糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸ト糸

手家内預ト平安
木蘭地の並糸
小具足ト

むらさきく門さくせよもせり知せしま

夏毛行帳 **アヤスリノ巻** **二毛馬** **同巻** 如三位
中お周

布下白 夏毛掛り様は二毛多きものを糸とせて

白布とよりて縫ふりおとてるりよりて女

中へは糸編みも先行名のいやしむらさき

とよりりるあすしは巻末見くるものくらも

せしむる ○ 貞丈云行帳オハカセタルハ

ノ具ノ中ニ行帳アリ古名抄ニ必用
之ニ毛馬ハニケルニ詞同ニトテ武士
ハ忌々シ曰人ナレハ口ホトニ毛馬ニ
ノセタルナリ

淡塗馬帽子 **長指巻** **小袴** **空色月出扇** **同**

糸多清浄と志婦女の馬帽子は白袖と七

りの巻末小袴きくは空より扇月出ししる

おく母皮のるれ車の毛はしむるおとて

○ 言潮と對面の時
れおの辨と云る

白鞠巻 **同巻** 法々本三節
後巻戸末 **九月廿廿夜世斗**

法々本三節巻終とて終らるるの浦村者

せりしむるさしたりりるあすもおとせ

て世後りすあすもあつるおしはよ教る

古に似るす悦ましく約束しりれど

黄生緒直糸 同糸威後 同糸緒と申す所也

黄生緒直糸 同糸威後 同糸緒と申す所也
黄生緒直糸 同糸威後 同糸緒と申す所也
黄生緒直糸 同糸威後 同糸緒と申す所也

赤地帛直糸 唐紅襦袢着長 黄漢海鏡 同糸

唐紅襦袢着長 黄漢海鏡 同糸
唐紅襦袢着長 黄漢海鏡 同糸
唐紅襦袢着長 黄漢海鏡 同糸

唐巻條巾袖 夕ウサキ 唐後威後 同卷 継信被 討糸

唐巻條巾袖 夕ウサキ 唐後威後 同卷 継信被 討糸
唐巻條巾袖 夕ウサキ 唐後威後 同卷 継信被 討糸
唐巻條巾袖 夕ウサキ 唐後威後 同卷 継信被 討糸

浅黄系威後巻 引合 同糸 同糸 同糸 同糸

浅黄系威後巻 引合 同糸 同糸 同糸 同糸
浅黄系威後巻 引合 同糸 同糸 同糸 同糸
浅黄系威後巻 引合 同糸 同糸 同糸 同糸

木緒 同卷 継信被 毎夜 欲其个 同糸

木緒 同卷 継信被 毎夜 欲其个 同糸
木緒 同卷 継信被 毎夜 欲其个 同糸
木緒 同卷 継信被 毎夜 欲其个 同糸

禍重糸 里草威陸 禍矢 十二乗 扇的 同糸

奈須上 一 糸一 作書兼て 禍衣陸重糸一 里草

威の陸多く 苦垢糸毛るる 一 糸一 作書兼て 諸一 向て

糸一 向て 中 福矢一 糸一 作書兼て 糸一 向て 糸一 向て

姉一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

ヒイッ射ル

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

里津洞 伝矢 塗篋 十二乗 三伏 同卷 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て 糸一 向て

てまるるりねとる野原の草の葉はく矢

管がくすくあそこせ射とんあひ

馬ノ草方

市ノ見之

佛棲枝

目果りくそりりんりせりけ落

さねくつねとこれとんきほふあふ

え二強のき然とせりしうちあけあり

きせ枝とせりし佛棲枝あふあそく落

せあ中とちりせもつしとぬちとせ攪あ

りせとせりし佛りぬふ○
御棲枝タラエト
ヨムナルヘニ棲

熊手

了字タラトヨム
不審

ぬち

右と之う○
ぬち

ち馬ノム子之是ニカキラス馬ニ用ル
ヲぬちト云丁古書ニ云多三ぬちトモ
ムナトモ云之俗説ニ馬ニハム子鷹ニ
ハぬちト云ハアヤマリナリ

白鶴

白旗

旗画

佛像

同卷

総評別高系
原由方系

迎の初宮より此神樂と云るふ出流宿ふり

言新と云鶴と白旗少者と中ねぬ堪僧

けもちせすして赤鶴白鶴七きり合て白

と原由の字赤鶴と云出た下とそ社以

と合りたて赤鶴ハ一つおもつる早すおけ

手家抄に旗のよこ
つしよい全割重を
あしりて

ナリナトとくくふふふとて若
ま子ナト正辨おのし幸りて柳の林に
きりて旗の文と合割重を俱利伽羅
ゆきと書幸りて二五重殿の多形と記し
田邊のころさより清事とて作らる加る

褐衣ニ布地錦ニテ神智在室 黒筆威護 奪咽

條中忠割合伏 十三束三伏 白篋 燒書同

卷 先帝ニ臣 和曰反進厨のしきく初を所し

てありりり福衣の護重をく布地の護と神

く申く運筆威の護く若何重毛あるる宗
て折立矣ある割中如言の初のさく之を
あはさよりあはく向く二所あより三所及
初く新中納言の形と村十く二の江矢と
一布くを村くあはれ中納言世矢と記し
あはく見ぬく初重の初席中忠割合てつ
ましりりりあはくぬ十三束三好きく白
より一束上く白篋く和曰少重を初重と
燒書とてをさくく初重と

口卷

右ノ足ノリ

クツニキト
ヨム

笠笈

同条新中納言知盛の恥名先ノ身

此れをち記さす定有恥と誰身我々云

恥より名りるハ東國の恥つゝ君ハ此笠下

足申す々々ものある名案し中ヤセハ赤

院次良親終とヤ○貞丈云此笠印ハ甲

アラス舟ニルニヲ
胃ニ付タルヲ云ニ
云ナリ

里革威葎

丸鞘太刀

同卷

大長風父子
江中捕系

終光

お及里革威の葎と袖も茶拾もちき^紅終光

角よりり^{本ノニ}者々々丸鞘の太刀^{本ノニ}を^{本ノニ}り

そ者強りし^{本ノニ}胃も先のすちあ^{本ノニ}る^{本ノニ}は^{本ノニ}ゆ^{本ノニ}り

何おす^{本ノニ}左右の^{本ノニ}もと^{本ノニ}初る^{本ノニ}る^{本ノニ}て^{本ノニ}終^{本ノニ}る^{本ノニ}の^{本ノニ}葎

り終る○貞丈云太平記ニ金作ノ丸鞘

丸クスルニハアラス金ニテサヤヲ一

圓ニ包メルトヲ丸サヤト云之

葎二願重着

同条乳母子伊賀吾月左衛門

長そ^{本ノニ}る^{本ノニ}い^{本ノニ}り^{本ノニ}る^{本ノニ}家^{本ノニ}長^{本ノニ}幼^{本ノニ}束^{本ノニ}い^{本ノニ}との^{本ノニ}を^{本ノニ}忘れ

ル^{本ノニ}ま^{本ノニ}り^{本ノニ}し^{本ノニ}る^{本ノニ}ま^{本ノニ}も^{本ノニ}葎^{本ノニ}二^{本ノニ}願^{本ノニ}重^{本ノニ}着^{本ノニ}す^{本ノニ}り^{本ノニ}柳^{本ノニ}の^{本ノニ}ま

も^{本ノニ}葎^{本ノニ}二^{本ノニ}願^{本ノニ}重^{本ノニ}着^{本ノニ}す^{本ノニ}り^{本ノニ}し^{本ノニ}る^{本ノニ}ま^{本ノニ}も^{本ノニ}葎^{本ノニ}二^{本ノニ}願^{本ノニ}重^{本ノニ}着^{本ノニ}す^{本ノニ}り^{本ノニ}し^{本ノニ}る^{本ノニ}ま^{本ノニ}も

入りきりぬ 糸巻 女院

物具 襦裳

同糸八代女院 言安と襦指具

ぬれ袴と新より入流まであはれりり 中あま
^中あま 甲う 用事そ 右の生流あて 井上の緒きとせ
⁺あま 下井 袴きとせあま ころねと 襦高りす
つきて 井上 袴より入る 袴よりねと 言安
父のまねあての 袴とせ 切り袴よりねと
大いさ せはきとせ 袴よりあま ころねと 父
つきて 海上 一里あま ころねと 袴よりねと 袴

柳ははらへりありり

草薙劔

天蠅所劔

十握劔

同巻

女院吉田入印

糸 新代よりつりり 天劔三あり 草薙劔

天蠅所劔 十握劔 是之十握劔 大和國

のりきりぬ 井上 袴とせあま ころねと 天蠅所劔

えと 羽と斬り劔 ころねと せはきとせ 井上

井上 袴とせあま 袴の自り 斬り袴とせ 井上

ころねと 利劔 ころねと せはきとせ 天蠅所劔

せはきとせあま 袴とせ 井上 袴とせ 井上

寛くありて草薙細と内妻とせしむる代に
御門の守とありて剣室細と申は是に

具足 同糸たんの浦とせしむる代に

おれ中にも世物も知なくしむる代に
せしむる代に先帝の御代に

るれとせしむる代に

兼従ひ女陰へ○ 爰ニ具足ト云ハヨロヒ
兼とせしむる代に
具ト云フヨ具足ト
イフナリ

石弓 同卷 九節判皮よ二位 兼中遠糸 兼とは後ハ山

東西深き糸とせしむる代に
糸のいととせしむる代に
良訓

前黄糸威燈巻 一尺三寸打刀 同卷 古座房 夜討糸

糸とせしむる代に

後巻一三寸五寸の古刀第一尺三寸の打刀也
ぬれもいけく品後々おれとせしむる代に

三尺五寸太刀 古くは

大幕 ヨロヒ物 同糸古座房と焼大佛

糸のしんじりして大直ぐち帯のきりてんを
内へ被さるに平丈斗のたてあてりやうを
物よりとりつちしるものたはぬや丸縫
はくちりけく只片一糸とえつるしやうも
みそ袖と後より袂判友の六条堀川へ押
寄しり

小鼻足

同条三のち 能 小鼻足斗りしり

然るぬと云やまにかぬと指さく二位ぬのん
糸のしんじり

湯衣菊綴袴

全儀太刀

同巻

志太三席
先生自

害糸

呂明 孝陰

押寄くかのぬきん糸湯衣

し菊もきししる袴のしんじり男のかし
子しりしつて丸出より只片かこいす
ちてしりしりしりしりしりしりしりしり
とんしりしりの男はと出くしりしりしり
新袖呂明をよ十位を人と思ひしりしり
とる十位を人と思ひのち力たおしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり

禰鏡こまつとせと臨下の右のこと三々寺
の太左刀ぬきもちてくぬくこ先の糸よまむ
いり 三尺寺大太刀 右ことり

目貫 卷廿注 宗遠ちりぬき 珍を

うつせのちりぬき又打ちりも目
貫よりあまりり名思義の思いやあすり
留すのすえり光二寸止盛久り先
高りとりとりとりとり

十五束 目糸注 尾尾 中尾

十五束あるをよくとりとりとり
尾尾耐り甲の神付板をとりとりとり

返り 中刺 神付板 古くとり

腰刀 征矢ノ尻 同巻 腰刀の

禰のよりも征矢の尻の禰もよりも禰
ぬのゆめとりとりとりとりとりとり
も運つらとりとりとりとりとりとり
あよすととりとりとりとりとり

頸出とりとりとりとりとりとり
卷十九 志太三
西久生

自著 百人ノ事ヲ列ス換セぬ中ニ書キ
控セ出シテ控セつ事ニ控セテ
控セテ御下リニ
志立三節ノ事ニ書キ
十所見人ノ事ニ之

續目録 後白河院の追書 竹中納言親

信之云人ナリト死父及家老更信補給長武

秀ヨリし時ノ國ハシレニ
ヨリヨリノ事ノ叙辭ニ
小坂車老更也

是ヨリノ事ニ述テ
ハシレニ
ヨリヨリノ事ノ叙辭ニ
小坂車老更也

是ヨリノ事ニ述テ
ハシレニ
ヨリヨリノ事ノ叙辭ニ
小坂車老更也

言ふ所のねこのぬいりりりとを来候と申す
又其と云ふつらあうらこい出れりや
おがりきりつれしやされりもとりやこれ
ハハ部大細といふもあさくぬ上人
まじ部中將とやらと付てのぬすりの
正業と云ふと折急ばしつめてしるやまを
ささくくささくおままのあうをくをりし
事と思ひ出くちと免れたりいと云ふ事
きりり○貞大娘其事係事ぬき妻此中

足くく繩目の色草と申す幕外は
のよく白餅くすきと云ふく繩目の
く節と云ふ。草くこのの右村文より
てそれと武芸園より出しおの鏡も
しらと免と云ふと其草とほやと裁く
おやししうやと云くすぢら云ふおと
さあてさあて細くたてと幕の
こやしくんもたかり

結鞍 卷二 流麗の糸 唄のちりり三よ

牛樂

の書とて作るまじくしこし口子こし
しを糸のてらあんと多あるてんおた也
てん^結と云ふのてらを幸敷りて
多ある出はとてすいしをけし
おのいしとてすいしをけし

結の糸編とて入結とて○^の結

と云ふ ○ 結鞍ノ名和名抄ニ見タリ又今
多^り ○ 昔物語ニ見タリ結鞍ト云ハク
ラホ子ノ名ニハアラズ和名抄ヲ考ル
ニ鞍具ノカサリヤウノ名ナリ

貞親教訓書抜書

伊勢伊勢守平貞親此
貞丈家傳書也

長祿元年書

刀脇指 刀川事御系とて立格兼下ウ

子も九寸半の刀上代より中世次道氏
とぬるとぬれととぬれととぬれ一尺八寸半
又尚世ある人々もぬれとぬれとぬれとぬれ
とす是とぬれとぬれとぬれとぬれとぬれ
とぬれとぬれとぬれとぬれとぬれとぬれ
とぬれとぬれとぬれとぬれとぬれとぬれ
とぬれとぬれとぬれとぬれとぬれとぬれ

上云一討してしるる世心のあるをせといひ
まゝに曲事しるる趣しつらに拾ひ申す事
軍陣に施設されし時の似合ぬ所
中向ふ物なるといふ似合る事仁
者の振持せしんやうと事いふ
扱はえつず尚代も人の物事いふ
小劣る向ふは代のつら記者のいふ
やとておもはるゝ○貞丈云力と海
力之扱扱はあゝとらたて置らたて置

れ云一物之もさし守りし守り申す申す
初ん事し申す隠叙と書く隠し申す
よとて懐中し申すしと事す之懐叙の事
外編終りし七巻の以りしつら記しと懐
とて懐中し申すしと事す之懐叙の事
しとて懐中し申すしと事す之懐叙の事
川とて懐中し申すしと事す之懐叙の事
て打力し申すしと事す之懐叙の事
とて懐中し申すしと事す之懐叙の事

す物取を接しつゝり際りぬぬと勢厚と
おぼくまぬくわたりしとやす之中緒とこ
しちかきしとすすむむや等ぬぬと
さしとまぬく外しつゝり出さるぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬと

隠劔

古事記

日置流法要記抄抜書

文安年中記
貞丈家藏

三ノノ関法

土名ノ世記法と云事村名

多々法と云記しつゝりぬぬとぬぬとぬぬと
つゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと
ぬぬとつゝりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと

あゝをいふに法也。も國法也。是と云ふは、
于法也。其列の事也。又云ぬり法也。云と法
也。其す只ぬりしうと云は、是と云ふ上、
ぬりしうと云ふは、國法と軍法と申す
法也。是と云ふは、刀杖つゝ糸也。是と云ふは、
形と云ふは、形と云ふは、つゝ糸と云ふは、
世と云ふは、世と云ふは、

世と云ふは、
世と云ふは、
世と云ふは、

職原抄板書

北畠親房撰

寶劔模作

神祇官

第十代崇神天皇漸畏

神威鑄改鏡劔奉安置神代之靈器於別

所是皇居神宮相分之初也

結唐尾馬

式部省

件日者式部卿乘鹿

絲毛車殿上巫一人乘結唐尾馬前駈云

云

將師之任

外武官

本朝將軍之任起於神

代其初天照大神欲降天孫於豐葦原中

國之時遣經津主神又云齊主神健雷神

鹿島神是也令平諸不順者云云大物主神師

八十万神昇天天神勅曰宣領八十万神

永為皇孫奉護乃使還降之云云一書曰

事代主神八万四千鬼類大神將也云云

又云大伴連遠祖天忍日命師來目部遠

祖天搥津大來目背負天磐鞞臂着後威

高鞞手提天拖弓天羽羽矢乃副持八月

鳴鏑又帶頭槌釵而立天孫之前云云

神代之制粗可見矣至于八代神武天皇

東征之日物部氏遠祖道臣命為軍師師古

武士云物部起於此云云○按道臣命物部氏ノ祖

トスルハ非也大伴氏ノ祖也古稱武士

以下ノ十二字上ノ誤ニ牽レテ出タリ

源氏物語桐壺ノ卷ノ河海抄ニ云物部

氏ノ遠祖天津誓神代ニ兵ヲ取リテ天

孫天降云云夕下上云時御前ヲ奉ル仍其

子孫諸ノ物部ヲ領云云テ武勇ノ子ヲ

掌^レ其後勇者物部卜^イ上習セ^ルナリ

右壺井氏書二見夕リ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

長秋記板書

皇后宮權大史師時記

鳥頭劔目貫緒切螺劔斑豕瓦鞘 大永

四年正月十六日大政大臣大饗御鷹飼

渡左近府生下毛野敦利鳥頭劔件劔也

而上皇賜裝束次借召預給云云銀作鷹頭切螺劔魚目貫緒云云斑豕瓦鞘入

○貞丈云鳥頭劔ハ鷹飼ニ限リテ佩ク

ナリ自餘ノ人ノ佩可キニ非ス相模國

鎌倉荏柄ノ天神ノ画像ハ菅公ノ自画

也ト云傳夕リ其像鳥頭ノ如クナル劔
ヲ画夕リト云然ラハ管公ノ自画ニテ
ハ有ヘカラス鳥頭劔ハ大臣ナト佩
夕々フベキ劔ニハ非ス

二條殿裝束抄拔書

飭劔紫擅地金作螺鈿劔 飭劔安元二

年三月四日後白川法皇御賀菩提院院
関白紫擅地金作螺鈿劔鞘上下有水精
伏龍貝中入玉是飭劔之由見月輪殿下
記

蒔繪劔 治承元年十二月二日中將良

通并賀帶唐草蒔繪劔此劔御堂関白御
物也并之時必帶之

鳥頭劔... 高麗... 皇女... 白... 大...



此書乃... 日本圖書印... 中... 王... 之... 山... 且... 日... 神... 身...
 一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...
 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十...

